

モノづくりからコトづくりへ

ガレージスマダ

「Garage Sumida」を墨田のモノづくりのハブに

株式会社 浜野製作所

代表取締役 浜野 慶一 さん



(株)浜野製作所は「おもてなしの心」「スピード・実行・継続」をキーワードに、常に新しいモノづくりにチャレンジしている。2005年に「すみだが元気になるものづくり企業大賞」を受賞したのを皮切りに各賞を受賞。その一方、首都圏の有力大学からインターンシップで学生を受け入れ、産学協同研究などを積極的に進めている。2009年には墨田区・早稲田大学・区内中小企業と共同で電気自動車「HOKUSAI」を開発。2012年からは中小企業、海洋研究開発機構(JAMSTEC)、大学などと深海探査艇「江戸っ子1号」プロジェクトを発足して共同開発、世界初の深海約8,000mでの3D動画撮影に成功した。また、JTB、墨田区内の中小企業と連携して子ども向け職人体験教室「キッザニア」を実施。2014年4月にはモノづくり施設「Garage Sumida」をオープンし、誰もが墨田区の町工場・職人の技術にアクセスできるハブを目指す。異業種交流会「浜野会」には大学の研究者、学生、IT技術者、モノづくりにかかわる企業家・技術者が集まり、日本のモノづくりの将来を熱く語っている。

——今年オープンした「Garage Sumida」が話題になっていますが、手応えはいかがですか。

浜野慶一（以下、姓のみ） 「Garage Sumida」の見学者はオープン後3カ月間で1,600名。想像以上の数に驚いています。見学にいらっしゃる方は、行政・商工会議所・大学教授・企業・メディアなど様々。先日、世界170カ国に拠点を持つ、米国のバイオ製剤メーカーのCEOが「インターネットで検索すると『HAMANO』という会社が何度も引っかかってくる。どんな会社か見てみたかった」と訪問してくださいました。その日の午後は東京工業大学のロボット工学の学生の方が来られ、当社スタッフと活発な意見交換を行いました。これまでに約180件の引合いをいただき、20件はすでに実際の仕事として受注しています。従来のようにお客さまの図面に基づいて加工するのではなく、「自分のアイデアをカタチにしたい」「もっと自由に製品を開発したい」というところから相談から始まるので、リードタイムがかかる反面、見積り効率は大きく改善しています。

——最近、3Dプリンタやレーザカッティングマシン、デスクトップ型のデジタル工作機器を使って「ワンオフ」(単品生産品)、「マスコダクトのカスタマイズ」などができる「FabLab」(Fabrication Laboratory)と呼ばれる施設が日本各地でオープンしています。デジタル工作機器などを設備するところが「Garage Sumida」と似ていますが、どんな違いがありますか。

浜野 「FabLab」は、3Dプリンタやレーザカッティングマシンなど、多様な工作機器を備えたワークショップです。たとえば「FabLab Shibuya」は、ロフトの新業態「LOFT&」と無印良品がコラボレーションした「デジタル加工工房」の運営に携わっています。お台場にできた「MONO」は、3Dプリンタやレーザカッティングマシンなど、モノづくりのための



①2014年4月にオープンしたモノづくり施設「Garage Sumida」の前に立つ浜野社長。オープン後3カ月で1,600名の見学者が訪れた／②③「Garage Sumida」の中には3Dプリンタやレーザカッティングマシンが設備され、製品のプロトタイプを製作できる

基本的な設備を設置して、個人やスタートアップ（起業家）が製品のプロトタイプを開発できる施設となっています。一方、「Garage Sumida」は墨田区の町工場・職人の技術にアクセスできるハブと位置づけています。墨田は高度経済成長を支えたモノづくりの町。工場数では都内で2番目、面積あたりの工場数では都内で、各工場が密に連携をとり、互いに支え合いながらモノづくりに取り組んできました。「Garage Sumida」の周辺には墨田区内の製造企業がサポートするリアルなモノづくりワールドがあり、単品・試作から本格的な製品化まで実現できます。当社も精密板金加工設備からプレス、金型加工設備まで、本格的な生産設備を保有しているので、単品・試作から量産まで、あらゆる場面对応できます。「Garage Sumida」は、企業や個人、行政や教育機関が墨田で培われて来た技術と出会うきっかけとなり、その結果として化学反応が起こり従来とはまったくちがう切り口のビジネスが生まれる——そうして生まれた事業やプロジェクトを本業のモノづくりで支援していきたいと思っています。

——浜野社長の活動を拝見していると、板金サプライヤーのビジネスモデルが大きく変化していると感じます。

浜野 リーマンショック以降、サプライヤーの企業価値は大きく変わりました。従来はQ,C,Dを遵守していれば仕事をいただきましたが、今はそれだけでは難しい。口を開けていても仕事は落ちてきません。新たな付加価値が必要で、それがエンジニアリング能力やデザイン能力だと思います。当社は東京という場所——様々な情報が集積する一方で大

量生産には最も不向きな場所で事業を行っています。その特性を活かし、上流の企画・開発まで遡って仕事を取っていく必要があります。「Garage Sumida」は、そのための取り組みのひとつでもあります。

——ブログやFacebookなど、Webを通じた情報発信にも積極的に取り組んでいらっしゃいますね。

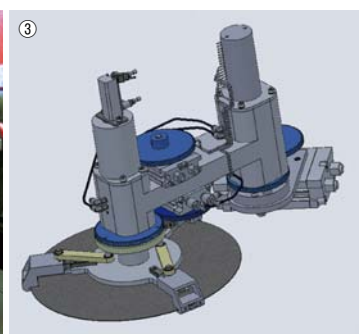
浜野 「Garage Sumida」の設立にあたっては、クラウ

会社概要

会社名	株式会社 浜野製作所
代表取締役	浜野 慶一
住所	東京都墨田区八広4-39-7
電話	03-5631-9111
設立	1978年
従業員	32名
業種	板金・架台・筐体設計、各種アセンブリー加工、精密板金加工・レーザ加工、金属プレス金型製作、金属プレス加工部品・試作品製作
URL	http://www.hamano-products.co.jp/

主要設備

- レーザマシン：LC-1212αMNT ●パンチングマシン：EM-255NT ●ベンディングマシン：FBDⅢ-8020NT、FMB-5613NT、RG-35S ●ファイバーレーザ溶接機
- プレスマシン：TP-15/35/45EX、TPL-60SI/80SI
- 3次元ソリッド板金CAD：SheetWorks ●2次元CAD/CAM：AP100 ●生産管理システム：WILL受注・出荷モジュール+Mなど ●稼働サポートシステム：vFactory



①バンチングマシンEM-255NT / ②ベンディングマシンFBDⅢ-8020NTによる曲げ加工 / ③3次元CADを活用し、企画・構想、設計・開発の段階から対応可能

ドファンディングサイト「^{マクアケ}Makuake」にプロジェクトの内容を公開し、コンセプトに共鳴してくださる方々からご支援をいただきました。Webに限らず、情報発信をする場合に大切なことは「発信しているか」ではなく「伝わっているか」。目指しているのは、みなさまに面白がっていただき、できればファンになっていただくことです。

——本業の精密板金加工の業績はいかがですか。

浜野 順調です。当社に限らず、製造業全体で繁忙感があると思います。ただ、昔と比べると忙しさの内容が変わったと感じます。最近の大手メーカーは試作に関しても1点ずつ相見積りを取られるので、価格競争が厳しくなっています。当社は2000年に本社工場がもらい火で全焼し、新工場を建設して精密板金加工をスタートしました。当時の得意先はたったの4社でしたが、今では約1,800社になりました。

受注の多くは単品や試作で、精度が厳しく短納期、なおかつ高度な品質管理と納期管理が求められます。

——得意先1,800社ともなると、管理工数が膨大になりますね。

浜野 「こんなものがほしい」というところから商談が始まるので、時間もかかります。打ち合わせを重ね、ようやくモノができて納品したのに、請求書を見たら1個200円だった、というようなことも中にはあります。こういった事態を避けるためには徹底したコスト管理が必要。「ものづくり補助金」で加工プロセスの“見える化”を実現するソフトの運用が採択されたので、これから導入を進めたいと考えています。

——墨田区の中小製造業の将来について、どのように見えていますか。

浜野 墨田区が35年ぶりに行った調査によると、区内の事



左 / 墨田区・早稲田大学・区内中小企業と共同で開発した電気自動車「HOKUSAI-Ⅲ」

右 / アルミボディの成形には同社の曲げ・溶接技術を結集した

業者数は3,100社まで減少したそうです。35年前の調査では9,800社あったということなので、35年間で約1/3になってしまいました。残っている企業も、後継者難などで今後5年以内に廃業を考えている事業者が500社ちかくあるということです。このことは地域経済にとっても大きな問題。何とか事業が継承できるようなスキームをつくらなければいけません。日本のモノづくりにとっても重大な局面に差しかかっていると感じます。そうした中で、どうしたらモノづくり企業が存続し、発展できるのか、考えなければいけません。

——何かアイデアはありますか。

浜野 最近の若い人の間では、性別を越えてモノづくりに関心を持つ人が増えています。私が以前住んでいた墨田区八広のマンションが空き部屋になったので、ここをインキュベーター施設にしました。最初は、早稲田大学の学生起業家が設立した(株)オリ研究所に使っていただきました。同社の代表取締役CEOの吉藤健太郎氏は高校時代に電動車いすの新機構の発明に関わり、2004年の高校生科学技術チャレンジ(JSEC)で文部科学大臣賞を、2005年に米国で開催されたインテル国際学生科学技術フェア(ISEF)に日本代表として出場し、Grand Award 3位を受賞しています。対孤独用分身コミュニケーションロボット「OriHime」を開発し、2012年には青年版国民栄誉賞とされる「人間力大賞」にも選ばれています。今は「OriHime」を使って、全国に51万人いるといわれる、病気などで学校に通うことができない子どもたちに、身体的問題や物理的距離を克服し、ベッドの上にながら「会いたい人に会えて、行きたいところへ行き、社会に参加できる」ようにするためのサービスの提供を目指しています。

——モノづくりに関わろうとしている若い人たちを支援するということですね。

浜野 モノづくりを目指す若い女性のスタートアップにも助力しています。若い人の間では、少しずつですがモノづくりの火種が広がっています。この国のモノづくりは、まだまだ捨てたものではありません。最近当社に入社した若手社員は、一度は上場会社に入社したものの、そこでの仕事に魅力を感じられなくなって当社へやってきました。若い人の価値観は変化していて、仕事にワクワクするものがあれば、躊躇なくモノづくりの世界へ飛び込んできます。そういう人たちに、モノづくりの魅力を知ってもらうことが大切です。当社が2012年からJTBBなどと協賛して進めている小学生の子どもたちを対象にした「キッザニア」の試みもその一環です。

——モノづくりの新しい取り組みという点では、ソフトバンクが感情認識パーソナルロボット「Pepper」をショップに展開し、家庭向けにも販売を開始。フォックスコングループが製



海洋研究開発機構(JAMSTEC)、大学などと深海探査艇「江戸っ子1号」プロジェクトを発足し、共同開発を行った／提供：江戸っ子1号プロジェクト推進委員会

造を請け負うことを表明しています。

浜野 モノづくりに携わる人々や、発想そのものが変わろうとしています。「Pepper」の愛嬌ある振る舞いの演出プランを作成しているのは吉本興業が設立した「よしもとロボット研究所」です。また、モノづくりとは離れますが、吉本興業は「ワラバイト」というビジネスも展開しています。アルバイトに明け暮れる若手芸人に、アルバイト先でも芸人としての仕事をしてもらおうというもので、ファーストフード店や大手衣料品チェーン店などに「ワラバイト」を派遣し、接客を通してお客さまに笑いを提供してもらいます。若手芸人は多くのお客さまを相手に芸を磨き、お客さまの満足度も向上し、リピーターが出てくれば店の売上も伸びる“三方良し”の発想です。こうした柔軟な発想力——“コトづくり”の発想が、これからのモノづくりの世界にも必要だと感じています。



JTBBや墨田区内の中小企業と連携し、子ども向け職人体験教室「キッザニア」を開催。同社の屋上からは東京スカイツリーがよく見える